

論文

1990年代の米国製テレビドラマにおける 中国系女性像

——ヘゲモニー理論からの社会的機能解明——

俣野裕美[†]

要約：本論文は、1990年代の米国製のテレビドラマ、*Twin Peaks*, *ER*, *Ally McBeal* に登場するアジア系女性の表象形態を明らかにし、グラムシの主張したヘゲモニー理論に基づいて、その社会的機能を明らかにするものである。アジア系女性はテレビドラマの中で、米国社会で理想とされる価値観を身に着けた白人に、望ましくない状況から救い出される人物として描かれていた。このような表象には、白人権力者がアジア系女性達に対して行った圧政的な歴史を合理化し、彼女達を彼らの利益に沿うように操作することを容易にする社会的機能が内包されていると考えられる。

キーワード：米国製テレビドラマ、アジア系女性、表象、ヘゲモニー、人種差別

目次

- 1 はじめに
- 2 先行研究
- 3 理論的枠組みと研究方法
 - 3-1 グラムシのヘゲモニー論
 - 3-2 文化作品のヘゲモニー
 - 3-3 研究対象と分析方法
- 4 テレビドラマのアジア系女性表象
 - 4-1 *Twin Peaks*
 - 4-2 *ER*
 - 4-3 *Ally McBeal*
 - 4-4 アジア系女性を助ける人物
- 5 表象の社会的機能
 - 5-1 「米国」に救済されるアジア系女性
 - 5-2 白人支配の正当化
- 6 おわりに

1 はじめに

米国製の映画やテレビドラマなどのエンターテインメント作品は、世界中の国の人々に

[†]同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

*2013年2月13日受付、査読審査を経て2013年4月10日掲載決定

視聴されており、人気を確立している。緻密なマーケット調査と激しい競争、莫大な製作費の中で育まれた、米国のエンターテインメント作品の魅力はそうした市場的準備と物量作戦によって支えられているといっても過言ではない。しかしその一方で、登場人物の描かれ方を巡っては、様々な議論が巻き起こっており、女性や障害者、性的マイノリティ、人種的マイノリティの表象に関しては、市民から学問的なレベルに至るまで、多くの非難や批判、論評がなされてきた。

中でも、様々な人種によって人口が構成されている米国では、人種的マイノリティ表象に関する研究には膨大な研究が積み重ねられてきている。しかしながら、米国の人種言説は白人と黒人の二項対立で語られる風潮⁽¹⁾にあるため、黒人以外の人々、特にアジア系の研究蓄積は相対的に少なく、十分な議論が行われていない状況である⁽²⁾。本論文では、テレビドラマに登場するアジア系女性の表象を明らかにし、グラムシのヘゲモニー理論に基づいてその社会的機能を考察する。

2 先行研究

アジア系表象を扱う研究においてまず指摘されるのが、映画やテレビドラマ等の映像メディア上にアジア系の人々が登場することが少ないということである。アジア系の役者が主役やレギュラーの座を射止めることは稀であり、オーディションを受けても獲得する役の殆どが通行人などの端役である傾向が強い。例えば、2000年にChildren Nowという団体が行った調査では、次のような結果が出た。実際に米国社会に生活する白人は全人口の69%なのに対し、テレビドラマにレギュラー出演する白人は76%と高い数字が出た。しかし、アジア系の人々の人口は全体の4%なのに対し、レギュラー出演は2%に過ぎなかった⁽³⁾。活躍の場が限られているアジア系の役者は、演技のキャリアを積み重ねる上で、白人の役者よりも困難を感じることもあるという⁽⁴⁾。

メディア上に登場するアジア系の人々には、ステレオタイプのな表象が付与される傾向にある。アジア系男性の場合、周囲に危険や脅威を与える「イエロー・ペリル」像、または、弱々しく魅力に欠けた軟弱な男性像が一般的である。女性は、「イエロー・ペリル」の女性版ともいえる、冷酷で攻撃的な「ドラゴン・レディ」⁽⁵⁾、男性に従順で寡黙な「ゲイシャ・ガール」などがある。また、女性は男性（特に白人男性）に性的な快楽を与える妖艶な（Hypersexualized 過度に性的魅力を付与された）人物として登場することも多い⁽⁶⁾。これらはアジア系を描く時に古くから用いられる典型的な表象像であるが、比較的新しいものでは、勤勉で優秀だが過度な競争心を持ち、感情に乏しい「モデル・マイノリティ」像も見られる⁽⁷⁾。

アジア系表象を巡っては、映画が分析対象とされることが多いが、Hamamoto (1994)

の研究はテレビ番組を主眼に置いた分析を行い、高く評価されている。Hamamoto は、アジア系の人々の表象は、米国内の状況や戦争、外交状況などの歴史的な出来事と関連を持っているとし、その表象は彼らを社会の中で下位化することに正当性を与えるものであるとした⁽⁸⁾。彼の研究をきっかけとしてテレビ番組、特にテレビドラマのアジア系表象に目が向けられ、上述のステレオタイプの存在を指摘する研究も散見されるようになった。これらの研究では、一つのドラマ作品、もしくは複数のドラマ作品のうち、数話のエピソードを取り上げて議論するものが一般的である。しかし、映画とは異なり、放送回を経るごとにストーリーが徐々に積み重ねられる特徴を持つテレビドラマの構造の中において、アジア系の登場人物が他の登場人物とどのような関係性を築いているかを体系的に調べたものは見当たらない。

アジア系の表象研究は未だ発展途上であり、今後の更なる分析が要されている分野であるが、中でもアジア系女性は米国社会においてその人種と性の観点から二重に差別を受ける可能性のある存在である。このような状況を踏まえて、本研究では複数のテレビドラマ作品を取り上げ、ストーリー全体の中でアジア系女性が他の登場人物と構築する関係特性と描写法を考察する。

3 理論的枠組みと研究方法

3-1 グラムシのヘゲモニー論

本論では表象を扱うにあたり、イタリアの思想家、アントニオ・グラムシのヘゲモニー理論を用いる。彼の理論はメディア上の表象を考える時に、非常に有用な道筋を示唆する。メディアは権力者層の意向に沿う形で情報発信を行う傾向があるとされる⁽⁹⁾ため、表象を扱うとき、権力やヘゲモニーとの関連性が頻繁に指摘される。ヘゲモニーは一般的に「覇権」と日本語訳されるが、その具体的な解釈や学問領域への応用は多様に分かれている。レーニンを始めとする主流のヘゲモニー論は、上部にいる支配層が単一の意見に人々を無条件に服従させるものとして捉えるのが一般的であった。しかしグラムシは、このような上から下へと垂直方向に力が作用する構造の考え方を打ち破り、ヘゲモニーにおける「指導と合意」という側面を重視したのである⁽¹⁰⁾。彼はヘゲモニーをある集団が物理的、強制的な力で人々を押しつけて権力を獲得するのではなく、道徳的、文化的、イデオロギー的な指導を経て、人々の合意を得ることによって権力を獲得してゆく過程として捉えたのである⁽¹¹⁾。その過程の中でも特に、知識人の果たす役割について注目した。知識人達はその活動において、政治的社会による支配と市民社会からの合意の間を媒介する存在として機能しているとした。彼らは、支配的な集団が押し付ける指導に対して人々が自発的に合意することを促すように作用しているのであ

る。加えて、その同意を拒もうとする諸集団を察知しそれを「合法的」な形で取り締まるなど、支配的集団の手代として機能していると主張した⁽¹²⁾。このように、グラムシは権力を持った支配的集団が非強制的な指導を行うことによって一般の市民からの合意を獲得していく過程をヘゲモニーといたのである。

スチュアート・ホールは、人や事物を表象する行為や、ある特定の方法で何かを表象する行為には権力関係が潜んでいることを指摘し、グラムシの理論を自身の研究に応用している。彼もグラムシと同様に、ある特定の支配集団が下位の人々に対して、上から下へと権力が行使される図式構造を否定し、物理的な力や弾圧を用いる側面ではなく、支配集団が人々の自発的な合意を勝ち得ようとする側面に注目した⁽¹³⁾。ある社会的グループは自らのグループに対する人々の合意を得て優位な立場を獲得しようと、物理的な力やそれ以外のあらゆる手段を使う。その社会的グループのヘゲモニーは、社会的、政治的、イデオロギー的な力のせめぎ合いを通して勝利を得る、つまり人々からの合意を勝ち得るのだが、ホールは、権力関係が潜んでいる表象もこのようなせめぎ合いが行われる場所の一つであると主張する⁽¹⁴⁾。表象は支配的集団が一般の人々からの合意を形成し、ヘゲモニーを得るための重要な場であるといえるだろう。

このように、グラムシの理論を応用すると、テレビドラマに表れるアジア系女性の表象には支配的集団の側が人種との関わりにおいて進んで肯定したいと思うものが含まれており、それに対して強制ではないやり方で人々の合意を促し、ヘゲモニーを獲得していくように社会的機能が含まれていると考えられる。

3-2 文化作品のヘゲモニー

実際、表象を分析する研究者の中にはグラムシの理論に基づきながら、具体的な文化作品の分析を行っている例がある。Marchetti (1993) はグラムシの理論を引き、ハリウッド映画には、性や人種に関するイデオロギーが表出されており、ヘゲモニーの構築を目指して権力を獲得しようとする作用があると主張する。その上で、古典的なハリウッド映画には西洋の文化に根源を持つ、いくつかのナラティブの形式が見られると指摘する。ナラティブは、白人のヒロインが他人種に囚われる *captivity* (監禁)、白人が他人種のエロティシズムに惹かれる *seduction* (誘惑)、白人が他人種の恋人を邪悪で退廃的な文化から救済する *salvation* (救済)、他人種が自身の文化を捨て、米国の主流文化に受け入れられる *assimilation* (同化) などが代表例として挙げられる。これらのナラティブは、プロテスタント主義、白人優位性、資本主義、家父長的な家族等の米国のアイデンティティを維持するために、今日のポピュラーメディアにおいても不朽の力を持っているとされる⁽¹⁵⁾。

例を挙げて詳しく検討すると、映画 *The World of Suzie Wong* (1960) (邦題『スージー

一・ウォンの世界』)は、salvation のナラティブの型に確実に則っている。画家になる夢を追って香港に来た米国出身の白人男性、ロバート (William Holden) が売春をして生計を立てているアジア系女性、スージー (Nancy Kwan) と出会う。ロバートは絵のモデルとしてスージーを描きながら、次第に彼女に惹かれ恋人同士となる。スージーに子供がいることが発覚してもロバートは咎めることなく、絵の勉強に使う予定だった資金を養育費に当てるなど、彼女を献身的に支えようとする。仲違いから一度は別れてしまうが、ある日、暴風雨によるがけ崩れに子供が巻き込まれ、スージーはロバートに助けを求める。子供は亡くなるが、葬儀で再び二人は愛を取り戻す。Marchetti は、映画終盤に二人がやがて米国へと旅立つことが示唆されることから、スージーは売春生活から救われロバートの庇護の下に入ると主張する。ロバートは白馬の騎士としてアジア系の恋人を助けており、また売春が蔓延る香港から脱出させて米国へと導く結末には、白人が異人種の恋人を悪から救い出すという物語構造がとられており、白人のモラルが絶対的なものとして位置付けられていると議論している⁽¹⁶⁾。つまり、この映画の中には白人のモラルが絶対的なものであるという、米国社会の中で支配集団が好む考えに対して、人々の合意を得ようとする社会的機能が内包されているのである。

このように、グラムシの理論を用いてアジア系女性の表象に含まれる社会的機能を読み取ることは、有効な方法であると考えられる。本論ではテレビドラマにおけるアジア系女性の表象形態を明らかにするとともに、グラムシのヘゲモニー論を元に表象に内包された社会的機能を考察する。

3-3 研究対象と分析方法

研究対象を選定するにあたり、数多ある米国製テレビドラマの中からアジア系女性が出演する作品のすべてを把握、分析することは物理的な限界があることが判明した。たとえば、アジア系の女優が出演していたとしても、クレジットにも名前が掲載されない端役の場合、作品を見つけることが難しい。米国では視聴率を獲得できない番組は、2、3話を放映後に打ち切りとなることがあるが、このような作品の場合は、ストーリーの流れを追うことが出来ず、分析対象として適さない。また、DVD やビデオ媒体として流通していない作品は、視聴、分析が困難である、などが主な原因である。そのため、作品の選定には次の基準を用いた。四大ネットワーク (ABC, CBS, NBC, FOX) にて、プライムタイム (東部時間 19~23 時) に放送された作品の中で、放送が 30 回以上継続していること。加えて、一つのシーズンにアジア系女性が 8 割以上出演しており、DVD もしくはビデオ化された作品であること⁽¹⁷⁾。こうした基準により、正確に作品を把握できるようになり、視聴、分析が可能となる。また今回の研究では、米国のエンターテインメント業界が多文化に目を向け始め、アジアの中でも東アジア文化作品への関心が高

まった1990年代に放送を開始した作品を対象とする⁽¹⁸⁾。さらに、この「アジア」系を「東アジア」系と限定し、国としては日本、韓国、中国系の女優を対象とすることにした⁽¹⁹⁾。

設定した基準を元に作品を探したところ、*Twin Peaks* (1990–1991: ABC)、*ER* (1995–2004: NBC)、*Ally McBeal* (1998–2002: FOX) が該当した。これらの作品には中国系の女優、Joan Chen, Ming-Na, Lucy Liu (作品順) が出演しており、作中で演じる役柄も中国系として設定されている⁽²⁰⁾。次章では、この三作品の分析を行う。

メディア作品の分析は時に主観性が指摘されることがあり⁽²¹⁾、客観性をいかに担保するかが問題となる。また前章で述べた通り、本研究では体系的にアジア系女性の表象を他の登場人物との関係性の中で捉えることを目的としている。そのため、本研究ではこれらを重視して分析方法を設定した。まず、作品中で中国系女性が登場する場面の台詞を全て文字に書き起こした。その資料を元に、中国系女性と他の登場人物との間で繰り返されるパターンを抽出し、一覧が可能となるように表を作成するという方法をとった。

4 テレビドラマのアジア系女性表象

4-1 *Twin Peaks*

Twin Peaks は、1990年から1991年にかけてABCにて放送された、David Lynch, Mark Frost 製作による作品である。FBI捜査官クーパーが、閑静な田舎町、ツイン・ピークスで起こった女子高校生殺害事件の謎を解き明かすにつれて、町の住人が抱える秘密が徐々に紐解かれてゆく、ミステリードラマである。Joan Chen が演じるジョセリンは、亡き夫アンドリューが所有していた製材所のオーナーを務めている。町の保安官ハリーと恋愛関係にあるが、彼女には他言できない過去がある。彼女は香港の貧しい家庭に生まれ、売春をして生計を立てていたが、ある日エッカードという実業家男性と恋に落ちる。彼女は売春生活から抜け出し、彼と共にビジネスをするようになるが、次第に彼の執着心に耐えかねるようになった。そして、エッカードの商売敵であるアンドリューという男性と出会い、エッカードには極秘に結婚し渡米する。エッカードは激怒し、米国にいる彼女を香港から脅迫し、アンドリューを殺害して彼が所有する製材所の土地を奪うよう命令する。怯えた彼女は人を雇ってアンドリューを殺害させた。こうした暗い過去⁽²²⁾が露呈しないようにしながら、ジョセリンはハリーと恋愛関係を続け、一方でエッカードの命令を果たすべく、町の資産家、ベンジャミンと手を組んで製材所の土地を獲得しようとしている。しかし、アンドリューの妹、キャサリンは兄の製材所のオーナーとなったジョセリンを憎んでいる。ジョセリンはキャサリンが復讐のため、ベンジャ

ミンと秘密裏に共謀し、自分を殺害するのではないかという恐怖心を常に抱えている。彼女は作中で、エッカードとキャサリンに怯え、両者と毅然と立ち向かうことが出来ず、不安を抱えている。このような彼女を守ろうとする人物がいる。ストーリー全体に渡って常に彼女を支えようとしている人物は、恋人のハリーである。紙幅の関係で全てを取り上げることは出来ないが、以下ではいくつかの具体的なシーンを取り上げながら、解説したい。

シーズン1 エピソード3 38分44秒

夜、仕事を終えたハリーは恋人のジョセリンの家に来て話をしている。しかし、ジョセリンの元気がないことに気が付く。

ハリー：Josie? Josie, what's wrong?

(ジョシー*, ジョシー, どうかしたのか?) *ジョシーはジョセリンの愛称

ジョセリン：Nothing.

(何もないわ)

ハリー：Nothing?

(何も?)

ジョセリン：うつむいて首を振る

ハリー：God, you're beautiful.

(ああ、君はなんてきれいなんだ。)

ジョセリン：暗い表情を解き、少し笑顔を見せる。

ハリー：Josie, there is something wrong. What is it? I want you to tell me.

(ジョシー, 何かあったんだろう。何なんだ? 話してくれ。)

ジョセリン：Something horrible is going to happen. They want to hurt me. I know it.

(恐ろしいことが怒るわ。彼らは私を傷つけようとしている。分かるの。)

ハリー：Who? Who wants to hurt you?

(誰だ? 誰が君を傷つけようとしているんだ?)

ジョセリン：Catherine. Catherine and Benjamin Horne.

(キャサリンよ。キャサリンとベンジャミン・ホーンよ。)

[日本語は筆者訳]

この場面でジョセリンは、アンドリューの妹であるキャサリンとベンジャミンの共謀を疑い、自分の身に危害が及ぶのではないかと怯えている。仕事を終えた恋人が会いに来て、その不安を隠すことが出来ずに暗い顔を見せてしまう。ハリーはジョセリンの表情から何か問題を抱えていることを即座に察知し、事情を聞かせて欲しいと懇願す

る。ジョセリンの拒否に対し、彼は彼女の美しさを引き合いに出した冗談で彼女の硬い心を解す。そしてようやくジョセリンは、自分に危険が迫っていることを打ち明ける。心配したハリーは、誰によって危険がもたらされようとしているのかを更に問い詰め、ジョセリンはその名を挙げる。ハリーは保安官であるため、町の要注意人物を把握しておきたいという意図もあるかもしれない。しかし、ハリーは仕事を終えており、保安官としてではなく、ジョセリンの恋人として会っている。また、彼女の外見を冗談にするところは、ジョセリンを単なる捜査の参考人ではなく、より親しい人物として捉えていることが分かる。ここには、不安に怯えるジョセリンを支えたいというハリーの強い意志が見られる。

シーズン2でジョセリンは、エッカードからの命令により急遽、母国の香港へ戻らざるを得なくなった。香港からエッカードの部下、ジョナサンがジョセリンを迎えに来て、彼女は十分な別れも出来ないまま、突然ハリーと別れざるを得なくなってしまった。空港へ向かう途中、ハリーへの恋しさが募り成す術がないジョセリンは、ジョナサンを暗殺し、瀕死の状態で町へ戻ってくる。数日後、ジョセリンに殺人の容疑がかかり、FBI捜査官のクーパーとハリーがジョセリンに事情を聞きに来る。

シーズン2 エピソード15 17分30秒

ハリー、クーパー、ジョセリンは机を囲んで話し合っている。

ハリー：無言で俯き、辛そうなジョセリンに Josie. This is it. The Seattle police want answer and I have to tell them something. They know you were connected with Jonathan.

(ジョシー、いいかい。シアトル警察は答えを欲しがっているし、僕は彼らに答えなければいけない。彼らは君がジョナサン殺害に関与したと思っているんだ。)

ジョセリン：How did he die?

(ジョナサンはどうやって死んだの?)

クーパー：He was shot three times in the back of the head.

(頭の後ろを銃で三度撃たれたんだ。)

ハリー：Josie . . . If you were ever gonna tell the truth, ジョセリン、机の下から手を伸ばし、ハリーと手をつなぐ now would be an ideal time.

(ジョシー、真実を話すなら、今が一番なんだよ。)

クーパー：Think I'll get another cup of joe.

(コーヒーをもう一杯いただこう。) 立ち去る

ジョセリンには殺人の容疑がかかっているだけの段階ではあるが、ジョナサンの殺害状況からクーパーもハリーも彼女が事件に何らかの関与をしたことを既に確信している。それにも関わらず、ハリーは俯いたままで無言のジョセリンを責めることはない。また、ジョセリンがクーパーに気付かれないように、机の下から手を伸ばす場面には、不安と恐怖から助けを求める気持ちが読み取れる。ハリーは保安官として職務を遂行する立場でありながら、ジョセリンの求めに応じ、その手を握り返して力になろうとしている。ここでもハリーは、恐怖に駆られるジョセリンを支えようとしていることが分かる。

作中で、ジョセリンは一貫してエッカードやキャサリンを始めとする多くの人々に怯えており、その度に不安に支配される。彼らと真っ向から対立するのではなく、上記のエピソードのように殺人事件を犯してしまう弱い側面を持っている。ハリーはこのような不安に怯える弱いジョセリンを精神的に支え、守ろうと試みる。ストーリーの終盤でジョセリンは死亡し、彼女の過去を全て知ったハリーは悲しみに暮れ、ジョセリンをツイン・ピークスから連れ出し、一緒に逃げるべきであったと後悔を露わにする場面もある（シーズン2 エピソード21）。このように、ハリーにはストーリー全体を通してジョセリンを守らなければならないという意思がある。一方、ジョセリンが他の人物を継続的に守るという場面は見られない。このドラマでは、ジョセリンが恋人であるハリーに支えられる関係が構築されているといえる。

4-2 ER

ER は、1995年から2004年にかけてNBCにて放送された、Michael Crichton 製作による作品である。シカゴの救急救命室に勤務する医師達の奮闘を描いたメディカルドラマである。Ming-Na が演じるジンメイは、頭脳明晰で優秀な医師であるが、独立心とキャリアを求める向上心が強すぎ、全てを独力でこなそうとするため、プライベートや仕事で失敗してしまうことが多い。その時、他の人物から助けられることになるが、シーズン全体に渡って、ジンメイを助けようとするのは、彼女の親友で医師のジョンである。以下では、いくつかのシーンを取り上げて説明する。

シーズン1では、ジンメイは医学生であり、研修の一環として病院にやってくる。彼女は、良い成績を得るため、難易度の高い治療を上司の指示を仰がずに独力でやっしまい、失敗をする。上司が駆けつけ、何とか患者の死を避けられることが判明するが、ジンメイは病院から逃げ出してしまふ。ジョンはジンメイを心配し、両親の結婚記念パーティーが開かれている彼女の家に行く。

シーズン1 エピソード21 39分29秒

ジンメイ：家の階段を下りる途中で、ジョンを見つけて驚く Let's go to the kitchen.

(キッチンに行きましょう。)

二人は、キッチンに入る

ジンメイ：I really didn't care about the patient. I just wanted the procedure.

(私は患者のことを気にかけていなかったわ。ただ治療をやりたかっただけなの。)

ジョン：By tomorrow everybody will forget.

(明日までには皆、忘れてるよ。)

ジンメイ：I won't. I'm quitting.

(私は忘れられない。辞めるわ。)

ジョン：You can't.

(だめだよ。)

ジンメイ：Sure, I can.

(いいえ、辞めるの。)

ジョン：Deb, listen. You're smart, you learn fast.

(デブ*、聞いて。君は頭もいいし、学ぶのも早い。) *デブはジンメイの愛称

ジンメイ：It's about taking care of people.

(患者を気かけられるかが問題なの。)

ジョン：You're gonna be a great doctor.

(君はいい医者になるよ。)

二人は椅子に腰かける

ジンメイ：I don't really like it. That's not completely true. I like the science of it. But the patients, the sickness . . . Sometimes it almost scares me.

(好きじゃないのよ。なんというのかしら。私は科学が好きなの。でも患者や病気は…時々怖くなるのよ。)

ジョン：It scared the hell out of me. When I was a kid older brother was sick. In and out of the hospital. When I saw the doctors I knew it was what I wanted to do.

(僕だって怖いさ。僕が子供だった頃、兄が病気でね。病院に入ったり出たりしていた。医者を見たとき、これこそ僕がなりたいたいものだって思った。)

ジンメイ：That's the difference, John. You think about treating patients. You take the time to talk to them. You listen to them. You care.

(そこが違うのよ、ジョン。あなたは患者を治療することを考える。あなたは患者と話す時間を取る。彼らの話を聞いているわ。あなたは患者のことを気かけるとよ。)

ジョン：ため息をついて So what are you gonna do?

(じゃあ、これからどうするの?)

ジンメイ：呆れた顔で周囲を見て Join the party. My parent's wedding anniversary. I'll wait tell my folks afterwards. Mother will throw up. Should be fun. 笑う。カーターを真剣な表情で見つめて Thanks.

(パーティに参加する。私の両親の結婚記念パーティなの。医師になるのを辞められて親戚中に言ってやる。母は吐いちゃうかも。おもしろくなりそう。ありがとう。)

ジョン：うなづく

[日本語は筆者訳]

この場面では、失敗をして病院を飛び出したジンメイをジョンが心配している。彼は、医師になる自信を喪失したジンメイに、失敗はすぐに忘れ去られると励ます。そして、病院を辞めると言うジンメイを引き留めようと、彼女が持つ医師としての素質を説明する。それに応じて彼女は、科学の側面のみを愛して、患者のことを考えることができない自分の至らない性格を打ち明ける。彼女の硬い辞意にジョンは、今後の将来設計を尋ねる。高名な医師で厳格な両親を嫌悪しているジンメイは、医師を辞めることを公言するという、両親が最も好まない形でパーティに「参加」と冗談を含んだ様子の返答をする。ジンメイは自分の気持ちや性格についてジョンに話を聞いてもらうことで、失敗の痛手を幾分か癒すことができ、このような冗談めかした返答と最後に感謝を伝えることが出来たのであろうと思われる。ここでジョンは、独力で事を運ぼうとして失敗したジンメイを助けようとしていることが分かる。

ジンメイは上の場面で医師への道を断念したものの諦めがつかず、後のシーズンでレジデント（研修医）として病院に勤務する。キャリアを順調に積み重ね、チーフレジデント（レジデントのリーダー）の地位を得たいと上司のケリーに申し出る。しかし、チーフレジデントになるために必要な研修日数を数日間未了であることが判明した。ジンメイは自分には素質があるとケリーに激しい口調で訴え、未修の数日間は非公式にチーフに就任する。非公式の状態でチーフとしての職務に忙殺されていたある日、同僚医師が行う重篤患者の救命を手伝う。指示を仰ごうとケリーを呼び出すが、ケリーはポケットベルを携帯しておらず連絡がつかない。一刻を争う中、ジンメイは診断の基本であるレントゲン写真を見るのを忘れ、誤った判断に基づきチーフの了承を要する治療を許可し、患者は死亡する。事態を知ったケリーは上層部と話し合い、患者の死亡と先述の医学生の頃の失敗を鑑みて、チーフの職を剥奪する決定が下される。過去の失敗を持ち出

されたジンメイは憤怒し、ケリーに病院を辞めると言う。以下は、その直後のジンメイとジョンの会話である。

シーズン 8 エピソード 4 41分 55秒

病院の屋上で話す二人。

ジンメイ：I always knew she was capable of stuff like this. I guess I fooled myself into thinking that she wouldn't do it to me. Has she offered you the job yet?

(ケリーは狡猾いのよ。私にこんな仕打ちはしないと書いていたけれど、愚かだったわね。ケリーはもうあなたにチーフレジデントの申し出をした?)

ジョン：うなずく I'm not sure that I want it.

(チーフレジデントになりたいのか、自分でもよく分からないんだ。)

ジンメイ：Yes, you do. You've always wanted it.

(なりたいと思っているわよ。ずっと目指してきたでしょう。)

ジョン：I'll pass if it means you'll stay.

(もし君が病院に残るなら、僕はチーフにはならないよ。)

ジンメイ：You should take it. I don't wanna be here anymore. Really. If it's not you, it'll be somebody else. And I'd rather it be you.

(なるべきよ。私はもうここには居たくないの。本当よ。もしあなたがチーフでなければ、他の誰かがなるでしょう。だったら、あなたになってももらいたいのよ。)

ジョン：You gonna try and stay in Chicago?

(シカゴで頑張るつもり?)

ジンメイ：I don't know.

(分からないわ。)

ジョン：There's still a spot open at Northwestern.

(ノースウェスタンの病院にはまだ空きがあるよ。)

ジンメイ：涙声になって Promise me, John, that whatever sacrifice you make for this place . . . you just make sure it's worth it.

(ジョン、約束して。何としてでも…頑張り抜いて。)

ジョン：うなずいて、泣いているデブを抱きしめる。

[日本語は筆者訳]

ポケットベルを携帯し忘れ、ジンメイの呼び出しに答えられなかったケリーにも患者死亡の責任がある。しかしジンメイはキャリアを追求しすぎるあまり、非公式のままチーフとなり、その職務がこなせず忙殺される中、診断の基本であるレントゲン写真を

見逃して、患者を死亡させた。努力家で頭脳明晰だが、キャリアを重視するばかりに失敗をする姿がこの場面でも見られる。ジョンは、激情に任せて病院を辞めると告げたジンメイに対し、上のシーズン1の場面と同様、手を差し伸べている。ジョンはジンメイの怒りに耳を傾けるばかりでなく、彼女が病院に留まるのであれば、チーフレジデントの職は断ると自らのキャリアを犠牲にする発言まで行い、彼女を思い止まらせようと尽力している。それでも辞職の意志を曲げず、今後のことは未定だと言うジンメイに、再就職先の病院の紹介をする。最後に、堪えきれず悔し涙を流すジンメイを抱きしめ、気持ちを抑えようとしている。ジョンはキャリアを求めて失敗を犯したジンメイを救おうとしているといえる。

他にも、一夜を共に過ごしただけの男性との間に子供を宿し、一人で出産しようとして不安に耐え切れなくなったジンメイに付き添ったり（シーズン7 エピソード9）、重い病気にかかった父を専門家の力を借りずに自宅で介護しようとする彼女を気遣ったりする（シーズン10 エピソード15）といった場面も見られる。このように、自らの力で全てを成し遂げようとしたり、キャリアを最優先に考えたりするという性格上の欠点の原因となって問題を生じさせたジンメイに、ジョンが傍について助けようとしている。しかし、ジンメイが他の登場人物との間に助けを与える関係を築くことはない⁽²³⁾。ジンメイが友人であるジョンから助けを与えられるという関係性が築かれている。

4-3 *Ally McBeal*

Ally McBeal は、1998年から2002年にかけてFOXにて放送された、David E. Kelly製作のドラマである。ボストンの法律事務所に勤務する、弁護士アリーを主人公に彼女とその同僚達が担当する裁判や人生をコミカルに描いたリーガルドラマである。Lucy Liuが演じる弁護士のリンは、有能だがその性格は「ドラゴン・レディ」と称される程⁽²⁴⁾、冷酷で攻撃的である。故に彼女は周囲の心情を害したり、波乱の事態を招いたりするような言動を取ることがある。その際、状況の悪化を防ぐため、傍にいる同僚達が彼女の発言や行動を抑制しようと試みる時がある。シーズン全体に渡って彼女を抑制するのが、親友で弁護士のネルという人物である。以下、いくつかのシーンを挙げながら詳しく述べたい。

シーズン2から登場したリンは当初、企業家であり、法律事務所の顧客として友人のネルに弁護の依頼に来ていた。彼女の横柄な態度に事務所の弁護士達は辟易していた。以下は、リンが新しい弁護を依頼するためにネルを訪れるシーンである。

シーズン2 エピソード3 00分04

リンはエレベーターから降りて事務所に入り、秘書のエレインと顔を合わせる。

リン：挑発的な口調で Hello.

(こんにちは。)

エレイン：以前リンに不愉快な思いをさせられているため、返答に窮するが作り笑いをして Ling, you are back?

(リン、また来たのね。)

リン：怒った顔で I'm here to see Nelle.

(ネルに会いに来たのよ。)

エレイン：Oh, certainly. And who would we be suing today?

(あらそう。それで、今日は誰を訴えるわけ?)

ネル：やってきて Ling.

(リン。)

リン：This woman drips with sarcasm at my personal expense.

(この人が私の個人的なことに皮肉を言うのよ。)

ネル：リンに微笑みながら Ling. One of disadvantages of having magnetism is that . . . you bring people out. People would otherwise go unnoticed. The fact you should be so annoying is really a tribute to you.

(リン、人を引き付ける魅力を持たない人間は、あなたみたいな(魅力ある)人に目をつけやすいのよ。魅力のない人には目もくれないけれど。彼女があなたを攻撃するのは、あなたへの賞賛の証なのよ。)

リン：Hmmm…エレインをつま先から頭の上まで見渡す。

(ふうん。)

エレイン：作り笑いをする。

ネル：Let's go to my office. We'll talk about what's the matter.

(私のオフィスに行きましょう。何があったのか、話し合しましょう。)

リン：ネルのオフィスへと去る。

ネル：すまなさそうな顔をして I'm sorry, she just . . .

(ごめんなさいね。彼女はただ…)

エレイン：怒りを抑えながら笑顔を作り Oh, yes. And thank you for defending me so staunchly, Nelle.

(いいのよ。熱心に私を弁護してくれてありがとう、ネル。)

ネル：去る

エレイン：笑顔を解いて怒りの表情を見せる。

[日本語は筆者訳]

エレインはリンの横柄な態度と言葉を聞いても無理に笑顔を作って話し続けているが、気分を害しているのは明らかである。これ以上のリンとの会話が好ましい状況を生むとは考えられない。そこへやってきたネルは瞬時に状況を把握し、エレインを魅力の欠如した人物と無礼な表現をし、まるで幼い子供をあやすかのような方法でリンの苛立ちをなだめている。そうしてリンを納得させて落ち着かせたところで、彼女を自分の部屋へ行くように促し、その場から去らせている。ネルは冷静かつ順序良くリンの行動を抑制しているのである。それに加え、ネルはエレインに対して謝罪し、弁解を行おうとしている。ネルはリンの言動を抑制し、彼女によって乱された状況の修復を行おうとしているのである。

弁護士資格を保持するリンは、弁護士として事務所で働くことになる。ある日、弁護士事務所のオフィスで、ネルとその恋人のジョンが親密な様子で話をしているのを発見する。

シーズン2 エピソード21 1分36秒

リン：獣のような唸り声（効果音として挿入されている）を響かせ、怒った表情で **This is an office place. People shouldn't be "happy".**

（ここはオフィスよ。人が「幸せ」になるところじゃないの。）

ネル、ジョン：リンの方を振り返る。

ネル：笑顔で **Ling!**

（リン！）

リン：**What exactly do you see in him, besides the top of his head?**

（一体彼のどこがいいの？頭の上しか見えない*のに。） *ジョンはネルより背が低い。

ジョン：リンの辛辣な言葉に戸惑い、何も言い返せない。

ネル：顔をしかめてから **Let's go get some coffee, Ling.** 半ばあきれた顔でリンの腕を引っ張り、ジョンから離れさせようとする。 **Uh, good luck with your trial. Call me later.**

（コーヒーを飲みに行きましょう。ええと、裁判頑張ってね。後から電話して。）

ジョン：黙ってうなづく

リン：**Don't tug me!**

（引っ張らないでよ！）

ネル：リンをさらに引っ張り，エレベーターに押し込む。

[日本語は筆者訳]

この場面で，リンは仲睦まじい二人の間に水を差しているのみならず，ジョンの身長
の低さを揶揄して恋人としての魅力を疑い，彼を困惑させている。このままリンが更に
発言を継続させれば，ジョンはさらに傷つき，ともすれば口論にまで発展する可能性が
否定できない。ネルはリンの言動を見極めてそのような事態が発生しないうちに先手を
打ち，コーヒーを飲みに行こうと誘い，リンをその場から半ば強制的に連れ去っている
のである。ネルはリンの更なる発言を抑制することで，事態の悪化を防いでいるといえ
る。

シーズン5では，リンは偶然に知事から判事の仕事をやってみないかという申し出を
受ける。判事になったリンは，ある日雑誌編集社から依頼を受け，セミヌード姿で雑誌
の表紙を飾ることになった。以下は，写真撮影の場でのリンとネルの会話である。

シーズン5 エピソード6 18分32秒

法廷にカメラが持ち込まれ，裸のリンは髪の毛で胸を隠した状態で机に座り，写真に
撮られている。

カメラマン：That's great.

(いいね。)

ネル：部屋に入り，辺りを見渡して驚く What's going on here?

(何をしているの?)

リン：I told you I have a photo shoot today.

(言ったでしょう。今日は写真撮影なの。)

ネル：無理に笑顔を作って But you didn't tell me it was a layout.

(でも，雑誌の撮影とは聞いていないわよ。)

リン：Cover of Talk magazine.

(トーク・マガジンの表紙よ。)

ネル：怒って Ling! You're a Judge. Do you think it's appropriate?

(リン！あなたは判事なのよ。不適切だと思わない?)

リン：Oh, please. Used to be women strip naked to have a chance at greatness. Now you
have to do great things to have chances to strip naked.

(やめてよ。女性はかつて，チャンスを掴むために裸になったものよ。今は，裸に
なるチャンスをつかむために，努力しないとイケない程なのよ。)

ネル：But Ling, on your life you're committed yourself to the ideal that a woman is what she wears. What are you today?

(でもリン、あなたはいつも、女は着るもので価値が決まると言っていたでしょう。今日のあなたは何なの?)

リン：A role model. If I can inspire a few girls to go to law school or have a perfect body then I've done my job. 写真撮影を中断しているカメラマンに怒って Snap!

(ロールモデルよ。私を見て、女の子たちがロースクールに行きたいとか、美しい体になりたいと思ってくれたら本望だわ。写真を撮って!)

ネル：怖気づく

リン：I've found myself, Nelle. I knew I eventually would.

(ネル、私は自分を見つけたの。いつかこうなるって思っていたわ。)

ネル：呆然となる

[日本語は筆者訳]

この場面でネルは、判事という厳格で責任ある立場でありながら、セミヌード姿で写真撮影に挑むリンに驚き、その不謹慎さが世間に与える悪影響を自覚した上で、彼女を厳しく咎めている。判事として不適切だという正論を持ち出して非難してもリンは写真撮影を止めない。次にネルは、女性は身に付ける服で自身の価値が定まるというリンが個人的に抱いている信念を持ち出し、彼女の価値観にすり合わせた説得を展開し、考えと行動の不一致を指摘する。ネルは、一般的な正論とリンにとっての価値観を巧みに組み合わせてリンの行動を抑制しようとしているのである。ここでは、ネルは根負けしてしまい、写真は撮られ続けている。しかし、倫理的な意識を欠き、その影響力が理解できないリンの行動を咎めて抑制を試みていることが分かるシーンである⁽²⁵⁾。

上で取り上げた場面の他、パーティでのリンの皮肉な表現が原因で巻き起こされそうになった口論をネルが止めるシーン(シーズン3 エピソード5)や、何か問題が起これば当事者同士の解決ではなく、直ちに訴訟に持ち込もうとするリンの姿勢をネルが制する(シーズン2 エピソード3)様子も見られる。しかし、リンがネルや他の人物の言動を抑制することはない。獰猛で冷酷なリンはネルによってその言動を抑制されるという関係性が生成されている。

4-4 アジア系女性を助ける人物

ミステリードラマ、メディカルドラマ、リーガルドラマと、三つの作品はそれぞれストーリーの性質を異にしているため、形式には相違があるものの、*Twin Peaks*, *ER*, *Ally*

McBeal に登場する三人のアジア系女性達は、好ましくない状況から救いの手を差し伸べられる人物として描かれているといえる。それでは、アジア系女性達に救いの手を差し伸べる側はどのような人物なのだろうか。ハリー、ジョン、ネルの最も顕著な共通点は、三者は白人だということである。以下では、それぞれの人物像を具体的に検討していきたい。

Twin Peaks のハリーの役柄は、地域の安全と平和の維持のために次々と襲いかかる困難に勇敢に挑み続ける保安官である。頭には開拓の精神を示すカウボーイ・ハットを被っており、その正式な名前はハリー・トゥルーマンといい、第二次世界大戦の終結と戦後処理を担当した、第33代米国大統領の Harry Truman と同名である。この名前は、製作者が意図的に大統領の名前に因んで付けたものであり、ハリーという人物像と適合するように名付けられたことが推測できる。つまり、ハリーは対外的に強いアメリカを彷彿とさせるイメージの男性だといえる。

ER のジョンは医師であるが、全米資産家リストの上位に名前が挙がる程の経済力を持った名家の出身である。祖父母は財団を立ち上げており、慈善事業として各地にクリニックや施設などを建設、父はファンド運用をしており、米国の経済界に多大な影響を与える一族である。ジョンは両親とはそりが合わず距離を置いており、財団とは関わりたくないという思いを持っているが、財団資金の運用の仕事の一部を担うことがあり、作品終盤のエピソードでは、死産した息子の名前を取って恵まれない子供たちへの病院を作っている。彼は単なる拝金主義の資産家というよりは、米国の経済界に広く影響を与える豊かな資金を持ち、それを弱い立場の人々のために使用できる寛大で慈しみに満ちた財力を喚起させる人物である。

Ally McBeal のネルは、大学時代からのリンの友人であり、敏腕の弁護士である。作品の中で、彼女の家庭状況等のバックグラウンドはほとんど明らかにされないが、彼女の容姿は注目に値する。彼女は、美しい顔立ちに、ブロンドの髪の毛、細く引き締まったグラマラスな身体、高い身長といった、ハリウッド映画が古くから描き続けてきた、「美人」の典型像である。彼女の容姿端麗な姿は、女性登場人物からは嫉妬と羨望の眼差しとなり、男性からは高嶺の花として常に憧れの対象となる。4-3で挙げた恋人のジョンは、ネルと恋愛関係になる前、彼女に恋い焦がれる気持ちを持つものの、その完璧で非の打ちどころのない美しさに怖気づき、話しかけることにすら困難を覚えた程度である。ネルは、典型的な美女を体現した人物なのである。

このように、アジア系女性を望ましくない状況から救い出そうと試みる人物達は、対外的に強いハリー、巨大かつ慈悲深い経済力を持つジョン、ハリウッドの美しい女性像を体現したネル、というように米国社会で理想とされる価値観を身に付けた白人なのである。

5 表象の社会的機能

5-1 「米国」に救済されるアジア系女性

分析したアジア系女性達は、製材所オーナー、緊急救命医師、弁護士と、いずれも自立し自分の才能と意志決定能力を用いて生きることができるといえるような人物である。ジョセリンは自らの力で職を得たのではなく、亡き夫の後を継いだという背景があるものの、製材所のオーナーとして従業員を取り仕切り、会社を運営している。ジンメイは、裕福な両親の元に生まれ、成績優秀な救急救命医である。リンはベンチャー企業家、弁護士、判事という三種類の職を渡り歩いている。一見すると自らの意志と力で人生を豊かに設計し、時には困難な立場にいる他者を助けられる能力を持っているかのように見えるが、彼女達はそのようには描かれない。彼女達の傍らには、常に理想を体現し誰もが賞賛の目を向けるであろう、米国社会の価値観を強く感じさせる白人が見守っており、彼らは状況に応じて彼女達の手を取って、間違った場所、好ましくない状況から正しい方向へと導こうとしているのである。彼女達を助ける白人達は必ずしも恋人ではないし、邪悪な文化から救われるというわけでもないが、ここには、3-2で取り上げた映画 *The World of Suzie Wong* と同様の *salvation* ナラティブの構造が大枠で踏襲されているといえる。つまり、白人側が絶対的なモラルを保持した人物として確立されているのである。学歴をつけて社会的地位の高い職に就いても、自らの主張を述べる能力を持っていても、経済的な成功を達成することができても、最終的な局面でアジア系女性は「弱く」「間違っている」ため、放置しておく進むべき道を歩むことができずに困難な状況に陥ってしまう。このような彼女達に対し、絶対的なモラルを保持した、「強く」「正しい」白人が導きを与え、救済しようとするのである。アジア系女性と彼女達を助ける白人の間には歴然とした上下関係が築かれている。つまり両者の間には、「強く」「正しい」白人と「弱く」「間違った」アジア系女性という二項対立が成立しているのである。

ヴィヴィオルカ(2007)はメディアと人種差別の関係性に関して、二つの研究の流れがあるという。一つは、メディアは社会で共有されている偏見やステレオタイプを人々にそのまま伝達するというものである。もう一方は、メディアが現実に基づかない物語や映像を作り出すことによって、人種差別を生じさせるというものである。ヴィヴィオルカは、両者のどちらか一方ではなく、メディアは他の領域の様々な行為者との関係性の中にあり、それによって支えられているという⁽²⁶⁾。「弱く」「間違った」アジア系女性の表象も社会的に育まれた価値観や偏見とメディア自体の関係性の中で生まれたといえる。その表象をヘゲモニーと関連付けた時、どのような社会的機能を持つのかを次に考察してみたい。

5-2 白人支配の正当化

グラムシのヘゲモニー理論を元にするると、表象には支配集団が人種との関係において進んで肯定したいと望むものが含まれ、それについて合意を得ようとする社会的機能があると先述した。このように考えると、分析した三作品におけるアジア系女性の表象は、現実の米国社会において、権力を保持した白人がアジア系女性達を意のままに操作することを容易にする土壌を形成する社会的機能が存在するといえる。

「弱く」「間違っただけ」姿からは、アジア系女性達が実際の米国社会を運営する能力を十分に保持しているという印象は抱かれにくい。常に救済されなければならない彼女達を現実に照らし合わせると、政治的、外交的、経済的、文化的に社会運営をする素質や能力に乏しい人物である。一方の白人達は、それとは正反対である。問題を発見して解決する能力に優れており、社会を運営する素質を満身に兼ね備えた人間としてのイメージが強い。米国社会はアジア系女性ではなく、理想的な価値観を具現化した白人権力者によって運営されることが望ましいと思わせる構造が形成されている。つまり、両者の関係から、アジア系女性達の参加なしに、権力を持った白人が意のままに社会運営をすることに正当性が与えられることになるのである。

Espiritu は、現代のメディアに描かれるアジア系男性の歪んだ表象は、白人からの圧政に苦しんだアジア系男性の過去を覆すものであるとした⁽²⁷⁾。分析したアジア系女性表象も同様の作用を持ちかねない。アジア系女性、特に中国系の女性が米国内で迎った過酷な歴史として挙げられるのが、移民制限に端を発した抑圧に苦しんだ過去である。19世紀半ばから20世紀初頭、ゴールド・ラッシュと共に西部地域が発展を遂げ労働力を要していたため、中国や韓国、日本などのアジア地域から多くの男性が出稼ぎに来た。彼らは低賃金と悪条件の下で雇われ、差別と偏見に悩まされながらも、米国の経済発展の土台を築いた。一方、女性（出稼ぎに来た男性の妻や子供）の入国には厳しい制限がかけられた。これには、女性の住居、食事、教育等の費用を抑えたいという白人権力者側の意図があったのだが、それは表に出さず様々な理由をつけて制限した。例えば、1875年、米国議会はページ法（Page Law）を通過させ、「売春婦と疑われる」中国からの女性の入国を禁じた。「売春婦と疑われる」という規定があったが、実際はほぼ全ての中国出身の女性を制限する結果となった。この法律は中国出身の女性の品行を疑うもので、人種と性の差別を露呈したものである。日本や韓国からの女性の数も同様に少なかった。その結果、男性と女性の人数には落差が生じた⁽²⁸⁾。女性がいないう男性達は、いわゆる「女性の仕事」とされる掃除や洗濯、炊事をしなければならず、時にはこれらを職とすることもあり、社会の中で「女性化」される存在となった。第二次世界大戦の終結前後、移民制限法が撤廃されると⁽²⁹⁾、女性達が多く米国に渡った。「女性化」されたアジア系男性の不満は、彼らに最も近い存在のアジア系女性達に向けられる傾向

が生じた。「男性らしさ」を取り戻したいと考えた男性は、女性達に父権的な振る舞いをして抑圧することがあった。1960年代の公民権運動や60年代後半から70年代のフェミニズム思想の広がりにおいて、アジア系女性達がアジア系男性から虐げられている証言を行おうとしても、文化の父権的な部分を誇張して白人の主流社会に迎合しようとするものだとして、アジア系男性達から厳しい目が向けられた。そのため、差別や偏見の苦痛を訴えることができる風潮においても、彼女達の声をもとめて理論化したり、効果的に社会に届けたりすることができなかつた⁽³⁰⁾。アジア系男性からの父権的な抑圧にも責任があるが、社会で差別を受けた彼らがその怒りの矛先を女性に向けて差別するという背景が存在する。彼女達の悲惨な状況の大元を形成したのは、経済発展を推し進め、性差別、人種差別的な法律を次々と制定してきた白人権力者側であるといえる。こうした圧政の罪も、「間違つた」アジア系女性が「正しい」白人によって助けられる表象によって軽減されかねない。社会運営能力のない彼女達に対する移民制限はやむを得ないことであり、また現代では白人達の導きを得て生活が十分に成り立っているとして、過去に対する罪の意識、反省が希薄になる。罪が減少することで、社会で彼女達を操作することをより円滑にする基礎が形成されかねない。

経済学者のチャールズ・ピアードによると、1787年の合衆国憲法は裕福な白人の利益を保証することを目的として制定されたと分析している。憲法制定前の旧制度では、財政的混乱により、富裕層の白人達は所有する公債の価値が暴落するのではないかと危機意識を抱いた。そこで彼らは旧制度を廃止し、利益を維持できるような形で憲法を制定した。実際、公債の価値は憲法制定後、6~20倍にまで跳ね上がったという。つまり米国の社会は、白人権力者の利益を最優先させることを大前提に成立したのである⁽³¹⁾。白人が優位な立場に立って彼らの利益に沿うように社会を運営し、利益を享受することは建国以来、支配者側の白人に望まれてきたことである。テレビドラマのアジア系女性の表象には、彼女達への利己的な操作を容易にする土壌を形成するという、米国社会で権力を持った白人側に望まれてきたことが含まれており、それに対して人々の合意を得ようとする社会的機能があると考えられる⁽³²⁾。

6 おわりに

本研究では、1990年代のテレビドラマにおけるアジア系女性像を分析し、その表象が白人に助けられるものであることを明らかにした。また、こうした表象には、アジア系女性達を意のままに操作してよいとしかねない土壌を形成する社会的機能があることを述べた。これまで注目されていなかったテレビドラマに焦点を当てストーリー全体から体系的にその表象を分析したことで、アジア系表象の研究に新たな側面を加えられた

と考えられる。

1990年代のアジア系女性の描かれ方は、2000年代のテレビドラマにも継承されていく。例えばメディカルドラマ、*Grey's Anatomy* (ABC: 2005–現在放送中)のアジア系女性の外科医には、*ER*のジンメイに酷似した性格形成がなされている。今回対象とした作品は、東アジアが注目された1990年代に放送が開始し、またDVDやビデオ媒体になっていることから、現在でも一般視聴者への影響力がある作品ではあるが、時代と作品数がかかなり限定された分析対象であることは記しておきたい。アジア系の表象形態の推移を更に詳しく捉えるには、今後、分析する作品の数を増やし、90年代以前とそれ以降も研究対象に含める必要がある。

また、白人だけが優位に位置することを肯定するようなアジア系女性の表象では、メディアの負うアカウンタビリティ(社会的責任を自覚し責務を履行し、それが出来ない場合には責めを負うこと)⁽³³⁾を果たすことができない。テレビドラマが人種差別や偏見は正との関係で、どのようにアカウンタビリティを遂行していくべきなののかについても、今後の課題としたい。

註

- (1) Locke, Brian (1998) "Here Comes the Judge: The Dancing Itos and the Televisual Construction of the Enemy Asian Male," Torres, Sasha ed., *Living Color: Race and Television in the United States*, Duke University Press: 241.
- (2) Ono, Kent A. and Pham, Vincent N. (2009) *Asian Americans and the Media*, Polity: 14.
- (3) Children Now (2001) "Fall Colors 2000–01: Prime Time Diversity Report", Children Now: 14, http://www.childrennow.org/uploads/documents/fall_colors_2001.pdf#search=Children+Now+fall+colors+2000
アクセス日 2012年12月12日。
黒人は実際の人口が12%なのに対し、レギュラー出演の割合は18%であった。これはバラエティーやコメディ番組にのみ多く出演する、ゲッター化という現象が起こっているためと考えられている。
- (4) Lee, Joann Faung Jean (2000) *Asian American actors: oral histories from stage, screen, and television*, Mcfarland & Co Inc. Publications.
- (5) 女優、Anna May Wong (1905–1961)が演じた役柄が有名である。「ドラゴン・レディ」という言葉は米国社会では広く使われており、アジア系に限らず、獷猛な怒りっぽい女性を指す際に用いられる。また米ソ冷戦期のアイゼンハワー大統領の政権下で、スパイ偵察機にこの名前が愛称として付けられたこともある。日常会話のレベルから国際政治のレベルまで広く使用される言葉である。
- (6) Sun, Chyng Feng (2003) Ling Woo in historical context *The New Face of Asian American Stereotypes on Television, Gender, race and class in media*: 656–664: 657–659.
- (7) Ono, Kent A. and Pham, Vincent N. (2009) *Asian Americans and the Media*, Polity: 80–86.
- (8) Hamamoto, Darrell Y. (1994) *Monitored peril: Asian Americans and the politics of TV representation*, University of Minnesota Press: 31.
- (9) Park, Jane and Wilkins, Karin (2005) "Re-orienting the Orientalist Gaze," *Global media Journal*, Vol.4, Issue 6: 1.
- (10) 黒沢唯昭 (2008) 『アントニオ・グラムシの思想的境位: 生産者社会の夢・市民社会の現実』, 社会評論社, 42頁.
- (11) *Ibid.*, 23

- (12) アントニオ・グラムシ著, 山崎功監修, 代久二編集(1963)『グラムシ選集』第三巻, 合同出版, 79-104 頁.
- (13) Hall, Stuart, ed. (1997) *Representation: cultural representations and signifying practices*, SAGE: 259-261.
- (14) Ibid., 348
- (15) Marchetti, Gina (1993) *Romance and the "Yellow Peril": Race, Sex, and Discursive Strategies in Hollywood Fiction*, University of California Press: 7-9
- (16) Ibid., 116-117
- (17) 8割以上の登場があると, レギュラー出演であるといえ, クレジットに名前が挙がるが多くなる。
- (18) Park, Jane Chi Hyun (2010) *Yellow Future Oriental Style in Hollywood Cinema*, University of Minnesota Press: 127
- (19) この三国の人々は身体的な似通りがあり, 中国系の人日本人を演じるなどのことが起こりやすい。
- (20) それぞれの作中で, 出自が中国系であるとの会話が見られる。
- (21) 藤田真文(2006)『ギフト, 再配達-テレビ・テキスト分析入門』, せりか書房, 5頁.
- (22) 彼女の過去は作中では描かれない。作品の終盤に, ジョセリンの口頭説明によって明かされるのみである。
- (23) ジンメイが単発的に他人を助ける場面は見られるが, 継続的に特定の人物を助ける様子はない。
- (24) Shah, Hemant (2003) "Asian Culture and Asian American Identities in US Television and Film," *Studies in Media and Information Literacy Education*, 3(3): 10
- (25) このシーンは, アジア系女性に Hypersexuality が付与されている証拠であり, リンの身体が性的に客体化されていることを表すものでもある。
- (26) ミシェル・ヴィヴィオルカ著, 森千香子訳(2007)『レイシズムの変貌 グローバル化がまねいた社会の人種化, 文化の断片化』, 明石書店, 136-139.
- (27) Espiritu, Yen Le (2000) *Asian American women and men*, Alta Mira: 91
- (28) Espiritu, Yen Le(1997)*Asian American Women and Men Labor, Laws, and Love*, Sage Publications: 16-17
- (29) 全ての移民制限が撤廃されたのは1965年のことである。
- (30) Ibid., 114
- (31) チャールズ・A・ピアード(池本幸三, 斉藤真解説)(1974)『合衆国憲法の経済的解釈』, 研究社出版, 232-233頁.
- (32) 俣野裕美(2012)「中国系アメリカ人女性の表象-テレビドラマ, *Ally McBeal* を例に-」『評論・社会科学』101号, 25-41. では, 本稿でも分析した *Ally McBeal* のリンのステレオタイプ表象が中国系アメリカ人である彼女を逸脱者化し, 「正常」な白人とは異なる「異常」な人物として描かれていることを指摘した。その結果, 「正常」な白人が社会を運営する能力を持つ人物となり, 白人支配の合理化を図っていると主張した。
- (33) デニス・マクウェール著, 渡辺武達訳(2009)『メディア・アカウンタビリティと公表行為の自由』, 論創社, 5-6頁.

参考文献

- アントニオ・グラムシ著, 片桐薫訳(2001)『グラムシ・セレクション』, 平凡社.
- 片桐薫(2008)『グラムシとわれわれの時代』, 論創社.
- 藤田真文, 岡井崇之編(2009)『プロセスが見えるメディア分析入門: コンテンツから日常を問い直す』, 世界思想社.
- Feng, Peter X, ed. (2002) *Screening Asian Americans*, Rutgers University Press.
- Festinger, L. (1950) "Informal social communication", *Psychological Review*, 7, 271-282.
- Lippmann, Walter (1922) *Public Opinion*, Macmillan Company.
- Lipsitz, George. (1988) *A Life in the Struggle: Ivory Perry and the Culture of Opposition*, Temple University Press.
- Mastro, Dana E. and Greenberg, Bradley S. (2000) "The Portrayal Racial Minorities on Prime Time Television,"

Journal of Broadcasting & Electronic Media, Fall: 690–703.

Praso, Sheridan (2006) *The Asian Mystique: Dragon Ladies, Geisha Girls, & Our Fantasies of the Exotic Orient*, Public Affairs.

Shimizu, Celine Parrenas (2007) *The Hypersexuality of Race: Perfoeming Asian/American Women on Screen and Scene*, Duke University Press.

The Representation of Chinese Women on the U.S. TV Series in 1990s :
Based on Hegemony Theory

Yumi Matano

This paper examines the representation of Asian women on the U.S. TV series, *Twin Peaks* (ABC), *ER* (NBC) and *Ally McBeal* (FOX) based on the hegemony theory of Antonio Gramsci. They are portrayed to be salvaged from the troubling situations that are caused by their own fault. Their savers are all white people, who hold the ideal and generous conceptions in the U.S. society. The relations between them bring a dichotomy : weak Asian women who are given salvation and strong white people who give salvation. This representational hierarchy rationalizes the historical oppression of Asian women by white people having the forceful authority in the past. In addition, it exploits Asian women and builds up the foundation to manipulate them in the way of economic and political interest of the advantaged white groups.

Key words : U.S. TV series, Asian women, Representation, Hegemony, Racism

